

# 開発途上国を舞台にした貧困に喘ぐ子供たちを負のサイクルから救うための教育手法についての考察

大森夏姫<sup>\*1</sup>

指導教員：山名和樹<sup>\*2</sup>

Email : [g23n.omori@ikubun.com](mailto:g23n.omori@ikubun.com)

\*1:私立郁文館グローバル高等学校国際科3年

\*2:私立郁文館グローバル高等学校

Key Words: 貧困, 教育, ビジネス

## 1. はじめに

小学生の頃に “必ずお返事書くからね” という本を読んだ。この本の内容は、先進国であるアメリカに住んでいるケイトリンはごく普通の生活をしていただが、文通をきっかけにジンバブエに住んでいるマーティンに出会い、ジンバブエという発展途上国が存在すること、彼女にとってのあたりまえの生活がジンバブエの人たちからしたら想像もできないような贅沢であること、その日に食べる食事がやっと手に入る、という生活をしていることを知った。ケイトリンはアメリカからマーティンへの経済的な補助を行い、一方マーティンは自学自習の努力の結果、IVY LEAGUE に入学することができたという実話である。この本から、開発途上国の教育は先進国に比べて大きな課題があることがわかる。なぜなら成績がクラスで一位でなかったら農作業や働きに出るほうがよほど役に立つと考えている、教育に対する意識の低い親が多いからだ。そこには先進国と開発途上国の義務教育への価値観の理解が大きく異なるということが垣間見える。このような考え方は本書に紹介されたものだけではなく、通例として開発途上国では広がっている。現に UNESCO (国際連合教育科学文化機関) によると、開発途上国では義務教育課程を修了できる子どもの割合は約 60%にとどまり、多くの子どもたちは初等教育の途中で学習を終え、家業や労働に従事している実態がある。

(1)

## 2. 開発途上国の現状

UNICEF によると教育と貧困は密接に関連している。<sup>(2)</sup> ワールドバンクによると、中等教育を修了した人と中退した人の年収格差は教育が 1 年追加されるごとに 10% 生じる。<sup>(3)</sup> よって、中等教育を修了することは経済的自立において必要不可欠であるということは明確である。しかしながら、貧困家庭は日々どのように生きるかということに精一杯であるため、教育の成果が現れる長期的視野を持つことは難しい。このような現実が、教育機会を奪い、教育格差を生み出し、貧困の連鎖を招いている。また、開発途上国の教育格差は家庭だけの問題ではなく、教員の数が足りない、学校自体がない、学校が建っている、維持していくほどのお金を用意できないなどの持続可能な学習環境が成立していないことも原因と

してある。このような連鎖が数世代続くことによって、国の停滞にもつながっている。<sup>(4)</sup> 貧困の連鎖を止めるために、数多くの NPO が活動している。その数は 1000 万団体をを超えていると言われる。しかしながら、その取り組みの多くは世間では知られていない。貧困解決のためにはそれぞれの活動を明らかにし、より多くの人たちがこの問題に能動的に関わることで問題の撲滅を目指す可能性がある。

## 3. 貧困問題解決に向けた事例

株式会社レッドドラゴンでは 2030 年までにビジネスを通じて、一万人の雇用創出、絶対的貧困を解決し、あらゆる貧困者のジャンプ台になるという理念のもと活動を展開している。支援国はカンボジア、インドネシア、ウクライナ、インド、ネパールの五か国である。教育に関する支援は、家計管理教育、自己啓発、ビジネスの作り方の三つに焦点を当て、教室を設ける代わりに、屋外に大きなナイトシアターを設けて、子どもたちを集めて一斉授業をするという教育機会を提供している。ナイトシアターとは野外映画のような設備を使い、教育機会を提供することである。子供達を昼間の労働党から解放される夜に地域の広場に集め、映像を見せながらお金、ビジネス、自己啓発の 3 つの分野を教える。野外映画のような没入感を持って、集中した環境の中で教育を進めることができるということも特徴の一つである。これら 3 つの教育を施すことで、自身でビジネスを立ち上げ、貧困層から抜け出すことできる。ビジネスに関しては、世界ですでに成功事例のあるスモールビジネスの手法を教え、成功への過程を作り上げている。立ち上げたビジネスにより採算が取れるようになったら、その利益の一部を徴収することで互いに利益のあるビジネスモデルとして成立させている。

## 4. 実践活動を目指すための課題

貧困層で暮らしている子どもたちは、日々の生活のために働きに出ることがより優先されるため、教育を十分に受けることができない。実際、UNICEF は、貧困地域に暮らす多くの子どもが学校に通わず、家庭や農場での

労働を強いられていると指摘している。<sup>(5)</sup>彼らの中には教育を受けたいと望む子どもも多いが、教育がどのように将来の収入や生活の安定につながるのかを理解できていない子どもも少なくない。そのため貧困層から抜け出すことのできないという負の連鎖に陥っている。地域に住んでいる両親、子どもに教育の大切さをどのように伝えるかということが課題である。ナイトシアターはコストを抑えた教育手法であり、ビジネスという面から貧困問題解決を目指す策として有効であると考えられるが、日本から現地に実際に渡航するため、1度の実践に関して多額の資金が必要となることが大きな課題である。

## 5. 解決策

レッドドラゴンの活動から課題解決に向けたヒントを得ることができる。例えば、寄付に頼ることなく、現地でスモールビジネスの成功例のノウハウを伝える。それにより受講者はビジネスの成功がより目指しやすくなる。成功し、利益が発生するようになれば、その一部をコンサルタント料として徴収することで、ビジネスサイクルとして回すことができる。このようなビジネスを幅広く展開することで、より多くの貧困層にそこから脱するための機会を与えることができる。このようにして募金やクラウドファンディングに加えてビジネス活動を行うことにより、自立させるための支援を実現できる。このように彼らの生活実態に合わせながらも上質な教育をより多くの人たちに提供する仕組みを整えていくことで、世界の貧困を断ち切ることか可能になるのではないだろうか。

## 6. まとめ

本研究は筆者が「必ずお返事書くからね」の本で感じたケイトリンの行動力と遠距離でも固く繋がったケイトリンとマーティンの友情の強さに感動して、貧困問題解決のため自分にもできることは何かと考え始めたところから始まった。ゼミ活動の一環で在日インドネシア学校へ運動会を開催したり、バングラデシュへ研修に行って世界の現状を自分の目で見たことで自分に出来ることが明確になりつつある。教育は点数を取るためのものだけでなく、世界をより良くするためのツールだ。これからもこのテーマについて知識を深め、それを活動に繋げることで社会貢献の担い手として責任を果たして行きたい。

## 謝辞

本論の執筆に際し、レッドドラゴンを紹介して頂いた私の父にこの場を借りて感謝申し上げます。

## 参考文献

(1) UNESCO (国際連合教育科学文化機関), 『2022 年版 グローバル教育モニタリング報告書: ジェンダーと教育』, 2022 年.  
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000382062>

(2) UNICEF (国連児童基金)

『世界の子どもの貧困に関する推計 2023 年版』  
UNICEF 統計報告, 第 15 巻, 第 2 号, pp. 1-50, 2023 年.  
<https://www.unicef.org/reports/child-poverty-global-estimates-2023>

(3) 世界銀行 (World Bank)

『貧困と共通繁栄 2022 年報告書: 教育と経済格差の関係』  
世界銀行研究シリーズ, 第 20 巻, 第 3 号, pp. 1-120, 2022 年.  
<https://www.worldbank.org/en/publication/poverty-and-shared-prosperity>

(4) UNICEF (国連児童基金)

『子どもの貧困: 世界推計 2023 年版 (Child Poverty: Global Estimates 2023)』  
UNICEF 統計報告, 第 15 巻, 第 2 号, pp. 1-50, 2023 年.  
<https://www.unicef.org/reports/child-poverty-global-estimates-2023>